

## 科学雑誌について

桑木彥雄

岩波書店発行の「科学」と同様な一般的科学雑誌は、英に Nature 米に Science 独に Naturwissenschaften 仏に Revue gen. d. Sciences 等があり、科学界のニュースを知る上に於て、毎日の新聞が日常生活に於けると同様に、科学者の間にはこれらの雑誌は必需品である。この中 Nature は最も古く、創刊一八六九年で週刊、今百四十巻三千三四百号に達しているが、初号以来体裁が餘り変つていないのは一の不思議である。英国流保守的の爲でもあるが、やがて一世紀にもなろうとするのに餘り体裁等を変えないですむように考えた最初の計画者も偉いと云わなければならぬであろう。最初の計画者の中に有名な天文学者ロッキヤーがあり、一九二〇年八十五歳で死ぬまで其編輯に關係していたといふ熱心家であつたそうである。然し大体の体裁は同じでも少しづつ変化があり、編輯者の工夫苦心の程が窺われる。初号以来の表紙のワーツワースの詩なども最近いつか見えなくなつた。此雑誌巻頭の新著の批評や、中程のニュースなど、イギリスのジャーナリズムの粹を發揮した愉快であり有益なものであるが、又レタース（寄書）が昔から呼物であつたけれども、近年は特に國際的で、材料も多く、研究の尖端を示し、此雑誌が如何に國際的であり、又世界各地の研究室で重宝がられているかが分る。Science は Nature に比すれば稍国内的の感があるが、近年米国学界の殷賑、歐洲等の学者の往来頻繁であるから、ニュースも自ら國際的であり、又近頃毎号末尾の Science Service が研究速報と

して特に注意を引いている。

ドイツの Naturwissenschaften は創刊後十五六年であるが、其前には、此種のドイツ系統の雑誌としては、維納<sup>ウィーン</sup>から発行した Naturwissenschaftliche Rundschau という大形の雑誌があり、ドイツには Naturw. Wochenschrift というのなどがあつた。前者は相当なものであつたが、後者はたまにしか有益な読物はなかつた。ドイツの学者は各専門に分れ、一般的即通俗的とする傾向があるから、雑誌も餘り発達しなかつたようであるが、Naturwissenschaften になつてから、巻頭の読物には流石<sup>さすが</sup>にドイツ學術の長所を示して、或は概括的なもの、或は哲学的なものに於て価値あるものが少くなかつた。然し<sup>しか</sup>此頃は書き手も減じたか稍淋<sup>やぶ</sup>しくなつたようである。フランスの前掲の雑誌も亦一種の体裁を具え、昔はボアンカレなども執筆したことあり、続けて見れば有益に違いないが経費節約のため近頃購読を廃したから、ここに紹介を略すが、其他フランスには此頃種々の叢書類で、雑誌と同様に短かい概括的なもので有益なものが多くなつた。イタリヤの Scientia は以上の諸雑誌とは異り、ニユース等はなきが、Rignano 氏編輯の下に科学綜合の國際的雑誌として論文と新著紹介とを主にした雑誌で、数年前 R 氏逝去の後も同方針で続けられている。此雑誌は言葉は仏語を本位にしてある。以上以外の諸國の同種の雑誌は餘り他に参照を見ず、在るにしても我國の「科学」に比すべき程度のものはないと思われる。「科学」などは若<sup>も</sup>し英語でも書かれていたら、直<sup>ただち</sup>に國際的になり得るであらうと思えば、ローマ字が我國でもっと一般的に行われたならば、国内的にも國際的にも一層便利であらうと思わざるを得ない。隣國上海からは「学芸」と「科学」との二つが発行され、漢文横書で、句読は西洋風であつた。一方は廃刊したとも聞く。

我國の「科学知識」「科学画報」と同様のものは古くは米の Scientific American が独占の形で、米には又 Popular

Science Monthly と同じにニュースを主とせず、論説を主とし、幾分我国の昔の東洋学芸雑誌にも似た雑誌があったが、両者とも今は以前と大分変り、他方に尚通俗的なものが派生し、後者は表題も改めた。大戦後イギリスで此種の雑誌として Conquest と Discovery とが発行されたが、数年の後合併した。然し其後も餘り振わないようである。此種類の雑誌は日本の方が編輯が進んでいるようである。英には又 Science Progress と題し、年四回で科学進歩の概略を要領よく書いた雑誌もある。

以上は各科共通であるが、物理学のみに就て研究論文の雑誌以外に、新著紹介其他、総括的な報告記事等のある雑誌は、ドイツに Physikalishe Zeitschrift があり、新著批評なども皆専門学者の手に成れる故有益である。近頃はレントゲンの発見の歴史につき J・シュタルク、M・キーン等の記事など一読の要があった。天文学に英の Observatory も同様な意味で所謂滋味に富む記事多く、科外の読者にも親しまれる。数学に米の Bull. of American math. Society や独の Jahresberichte d. deutsch. math. Gesellschaft なども大体の模様を知るに便で、英の Math. Gazette は稍教育的であるが、近頃フォーサイスが学生時代の回顧など面白き読物であった。教育的のものには維納に昔マツハ、ボスケなどの創めたもの、其他米仏独等に数種あるが執筆者に権威者を得なければ振わないようである。

科学の歴史及哲学の研究は近時益々一の専門科学としての独立性並に重要性を認められて来たから、科学一般という意味もあり、その専門雑誌を数うれば G. Sarton 編輯の Isis は既に屢紹介されたが、今二十餘巻に達した。イタリアの Miel 編輯の Archeion と同じもの、國際的科学史アカデミー機関誌として十七巻に至り、パリ大学の科学及工業史教室発行として Hales 第一年度分を今年新たに発行した。ドイツの古くからあるものを改題して Quellen und Studien z. Geschichte d. Mathematik と同 Naturw., Medizin u. Technik として数巻

に及んだものがある。哲学には Carnap 及 Reichenbach 編輯 Erkenntnis なる雑誌、発刊以来四五年に及び、主任編輯者の一人、ドイツを去って土耳其に赴ける等の事情に拘らず、発行を継続している。又アメリカから昨年以來 Philosophy of Science なる年四回の雑誌発行され、有力な論文が多い。

(昭和十年九月、東京堂月報)

- 
- 桑木或雄著『科学史考』（河出書房、昭和一九年）所収。
  - 読みやすさのために、旧漢字は新漢字に、旧かなは新かなに変更し、適宜振り仮名をつけた。ただし、一部の漢字は旧漢字のままにした。
  - PDF化には $\text{\LaTeX}$ 2 $\epsilon$ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、  
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。